洛友會報

京都大学工学部電気系教室内
洛　友　会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

コンピュータの発展とともに

関西支部長　駒谷喜代俊（昭52年卒）



今年6月から、関西支部長を務めております。還暦を過ぎて、再び母校の皆様とお会いする機会が増えましたこと、大変ありがたく思っております。微力ながら、支部の発展に取り組みますので、よろしくお願いいたします。

私は1979年に三菱電機に入社してから、20年間を研究所で、その後は製作所で、列車やエレベータ群の運行管理や道路交通を対象に、コンピュータを用いて、人の移動を安全・円滑・快適に制御する技術の開発と実用化の仕事をしてきました。学生時代は学部・修士とも卯本重郎先生のご指導のもと、コンピュータシミュレーションによるMHD発電機の3次元解析の研究をしておりましたので、これまで一貫して、コンピュータ・ソフトウェアに携わってきたことになります。この間、1989年には、西川禕一先生のご指導のもと、システムのモデリングとシミュレーションに関する研究成果を学位論文にまとめることができました。両先生には大変感謝しております。

さて、学部の頃は、研究室から大型計算機センターまで数千枚のパンチカードを運んでジョブ処理を入力し、計算結果が出力されるまで、数時間ほど待つ状況でした。しかし、修士の時には、TSS（タイムシェアリングシステム）を利用できるようになり、パンチカードから解放されたことを懐かしく思い出します。その後のコンピュータの発展は皆様のご存じの通りですが、コンピュータの性能が飛躍的に向上した時代に、私自身が技術者として仕事ができましたことは非常な幸運に恵まれたことと思っております。

振り返ってみれば、三菱電機に入社してまもなく、AI（人工知能）ブームが到来しました。記号処理言語や並列推論マシンが脚光を浴び、様々な分野でエキスパート（専門家）システムが開発されました。鉄道分野でも、福森孝司氏（昭和44年卒）が、都市近郊の通勤路線を対象として、事故や故障で列車運行が遅延した場合にダイヤ変更案を作成する運転整理エキスパートシステムを開発され、私はこれを実用化する仕事に取り組むことになりました。運転整理は単に遅延時間を最小化するだけではなく、乗客への迷惑を最小限にとどめつつ計画ダイヤにすみやかに復旧させる多目的最適化問題です。指令員と呼ばれる経験を積んだ専門家が路線特性を考慮しながら問題を解決しています。エキスパートシステムは、こうした経験知の世界にもコンピュータを活用する先鞭となりました。しかし、専門家の支援はできても、専門家の代替として実用化される事例は少なく、AIブームは去りました。こうした状況で、幸いにも、この技術を90年代に新幹線の運転整理支援システムとして実用化することができました。新幹線では乗降時間の影響が少ないうえに、高速で多数の列車が走行するため、迅速な判断が必要となります。コンピュータにとって、ちょうど手頃な問題に巡り会えたのではないかと思っております。

また、ほぼ同じ時期に、ファジィ・ルールベースを用いたエレベータ群管理システムを実用化することができました。これは、4台から8台のエレベータを一つの群として運行を管理し、各フロアの乗客に最も適切なエレベータを即時に割り当てる問題です。従来は、特定のエレベータを割り当てた場合の待ち時間、別のエレベータが先に到着する予報外れ確率、到着したエレベータが満員である確率などの予測値を組み合わせて、割り当てを決定していました。新しい群管理システムは、ある特定の交通状況をファジィ集合で表現し、乗客が発生した時点での交通状況に対して、サービスの悪化を回避するための手順をIF-THEN形式で記述したルールベースシステムで構築しています。これにより、長時間待ちや予報外れなどのサービス悪化を回避するとともに、例えば、近い将来に多数のエレベータが特定のエリアに集中してしまうような不具合な現象を回避することが可能となりました。

この時代になると、高い演算能力とGUI（グラフィック・ユーザ・インターフェース）性能に優れたEWS（エンジニアリング・ワークステーション）を個人が専有できるようになり

会報のメール通知サービス 登録受付中

「印刷された会報は要らない。パソコンで読む。環境保護に協力する。」という会員の皆様に、会報の発行をメールでお知らせするサービスを開始しました。

ご希望の方は、「会報メール通知希望」とお名前を 洛友会 e-rakuyu@kuee.kyoto-u.ac.jpまでお送りください。

併せて、技術広報誌cueのメール通知サービスも受け付けております。

ました。ＥＷＳを用いれば、様々な条件を与えて、運転整理や群管理のシミュレーションを高速に何度でも実行することができます。これらのシステムを実用化できたことも、ソフトウェアを用いたコンピュータ上での思考実験の賜物であったと思っております。また、この時、ソフトウェアが「ことばで機能を作り出す技術」であるという言葉を実感できました。パンチカードから15年ほどの時間がたっていました。

次に、２０００年頃からは、非常停止やインターロックなどの安全防護機能にも、コンピュータを活用するようになり、安全性という課題に取り組むことになりました。この時代、ＩＳＯ／ＩＥＣガイド51が発行され、安全とリスクの定義、リスクを低減する方策が提示されました。さらに、ＩＥＣ61508では、コンピュータやソフトウェアを安全防護システムに適用するための要求事項が規定されました。「人は誤り、機械は故障する」という言葉がありますが、コンピュータ制御でも誤りや故障が発生していないかを常に診断し、それらを検知した場合は、安全側の状態に固定することが基本となります。現実には、国内での安全基準と国際規格との差異を明確にしつつ、従来製品を拡張するか、あるいは新規に開発するかに悩みながら、仕事を進めることとなりました。さらに、安全性の第３者認証という課題も加わりましたが、これまでに鉄道の信号システム、エレベータの電子安全システム、ＦＡの安全シーケンサなどを実用化することができました。

この分野では、国際規格とその適合性評価が非常に重要で、ＩＥＣが大きな役割を果たしています。国際規格は海外市場では入札要件になるため、企業としては適合性評価だけでなく、その上流である規格化活動にも注力する必要があります。私も鉄道車両用ネットワークにＥｔｈｅｒｎｅｔを適用するために、２００９年から３年間にわたりＩＥＣ６１３７５の改訂作業に参加しました。立場や目的が異なる国内および欧州の競合他社との共同作業であり、貴重な経験となりました。特に、ＩＥＣでは各国が投票権を持っており、議長国（イタリア）が、ドイツとフランスが対立する中で、日本など他の参加国も巻き込みながら、期限内に決着させるプロセスは見事なものでした。最終的には、当初の狙い通りに、規格が発行されました。しかし、今後は規格に追従するだけはなく、ルールメーカーとして規格を作成することの重要性を実感することができました。なお、野村淳二氏（昭和46年卒）がＩＥＣの第34代会長としてご活躍されており、今年４月の洛友会会報にＩＥＣの現状をご紹介されています。また、同じく４月号に森岡仁志氏（平成３年卒）がＩＥＥＥでの標準化活動の事例をご紹介されています。国際規格にご興味のある方は、これらをお読みいただければ、大変参考になると思います。

最後になりますが、ここ数年、またＡＩブームが到来しています。人間の知性を超える技術的特異点を迎えるのか、または幻想となるのか、注目しています。個人的には車の自動運転に興味を持っていますが、これが広く普及するためには、安全性だけではなく、安心が重要なキーワードになると思っています。「安心」は技術的に扱うことが難しい課題ですが、新たなフロンティアかもしれないと期待しています。

教室だより

退職記念行事のご案内

松山隆司教授におかれましては、来る平成29年３月31日付けで定年を迎えられることになりました。

つきましては左記の通り、先生の最終講義ならびに記念行事を開催することとなりましたので、ご案内申し上げます。

【松山隆司教授　最終講義のご案内】

日　時：平成29年１月18日（水）午後３時半～午後５時
場　所：京都大学吉田キャンパス電気総合館１階大講義室
題　目：「コトの科学」の創成を目指して
　　～分散協調型システム構成論からのアプローチ～
連絡先：川嶋宏彰 准教授、延原章平 講師
Email：2017event@vision.kuee.kyoto-u.ac.jp
※講義終了後に、百周年時計台記念館国際交流ホールⅢにて懇談会（軽食、無料）を予定しています。

【松山隆司教授　退職記念シンポジウムおよびパーティのご案内】

日　時：平成29年５月20日（土）午後
場　所：ウェスティン都ホテル京都
にて開催予定です。詳細が決まりましたら、改めてご案内させて頂きます。
お問い合わせは、最終講義と同じ連絡先までお願い致します。

平成28年度 懇話会 開催のご案内

在校生（学生会員）と卒業生（正会員）の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、改めてお知らせいたします。是非ご参加ください。

記

日　時：平成28年11月11日（金）14時30分～19時30分
場　所：吉田キャンパス電気総合館 大講義室
　　懇親会：生協北部食堂2階

プログラム（予定）：
14時30分～ 開会挨拶
（電気電子工学科 学科長　守倉正博 教授）
14時40分～ 第1部「Episode：江戸幕末～明治維新期の電気通信技術黎明」
第2部「超電導科学技術と応用工学の発展」
牟田　一彌　先生（京都大学名誉教授）
15時30分～ KDDIにおけるネットワークの高度化と品質向上への取り組み」
松ヶ谷　篤史氏（KDDI（株）・平17年卒）
16時20分～ 休憩
16時30分～「放送局の技術の仕事 ～メディア環境の変化と対応」
千原　邦義 氏（朝日放送（株）・昭54年卒）
18時00分～ 懇親会（生協北部食堂2F）
（会費：社会人 3，000円、学生 無料）

連絡先：電気電子工学科事務室
電　話：075-753-5273
FAX：075-753-5271
Eメール：konwa-kai@kuee.kyoto-u.ac.jp

会員寄稿

私と体操競技

小楠　幸治
（平2年卒・中部支部）

今年の夏のリオデジャネイロオリンピックでは、各種目で多くのメダルを取り、大変盛り上がりました。特に私が注目していた体操競技では、12年ぶりに男子団体の金メダルを取ることができました。メンバーの失敗を他のメンバーが補い、支えながら頑張っている姿を見ていると、体操競技は個人種目ですが、チームワークの大切さを感じました。また、男子個人総合では下馬評通り内村選手が優勝しましたが、ウクライナの選手と最後まで争った僅差の勝利であり、歴史に残る戦いだったと思います。次の東京オリンピックでは是非競技会場に見に行きたいものです。

私が体操競技と出会ったのは、中学の時、兄の影響もあって体操部に入部したことです。体を動かすことが好きであり、顧問の先生の指導にも恵まれ、大会ではそれなりの成績を残すことができ、高校2年と3年では県の代表として国民総合体育大会にも出場させて頂きました。その後、京大に入学し体育会の体操部に入部しました。大学では厳しい練習でインカレを目指す一方で、旧帝国大学の対抗戦（七大戦）や東京大学・横浜国立大学との対抗戦、京阪神の国立大学の対抗戦など、多くの大会の中で多くの友人を得ることができました。

中学から大学まで体操競技を続けてきましたが、その後社会人となって後、25年以上も体操競技を続けているのは自分でも驚きです。そのきっかけとなったのが、大学院の時に初めて出場した全日本社会人大会への参加です。社会人大会とは、文字通り学生を卒業した社会人が出場する体操の全国大会です。大会は1部、2部に分かれており、1部はオリンピックを目指す選手が出場し、リオで金メダルを取った内村選手も出場します。一方、2部は趣味で体操を続けている人のための大会です。下は大学卒業後の20歳代から上は60歳代まで、男女合わせて300人～400人規模の大会です。毎年9月に全国各地（北は北海道から南は福岡まで）で開催されます。

大学を卒業以来25年以上この大会に継続して出場しているのは、私なりにこの大会の楽しみ方があったからではないかと思っています。その楽しみ方を3点ご紹介します。

① 健康を維持する

毎年9月の大会出場に向けて、4月ぐらいから練習を始めます。練習と言っても、毎日できる訳ではないので、週末に時間を作ります。最初は体力作りや筋力トレーニングに励み、大会が近づくと技の練習をやります。この大会への準備によって、冬場に落ちた筋力が回復し、体型維持や健康増進に繋がっていると思っています。幸いにもこの取り組みのお蔭か、いまのところ会社の健康診断で異常と判定されることはありません。

② 得点を追及する

社会人大会には年長者が楽しめる仕組みが整っています。当然ながら年齢とともに、昔できた技はできなくなってきます。昔は2回まわれた宙返りも、今は1回しか回ることができず、通常であれば得点は下がってきます。社会人大会では年長者のモチベーション向上のため、年齢加点の仕組みを採用しています。30歳代、40歳代、50歳代と年齢に応じた加点があり、技ができなくなっても、年齢とともに得点が挙がっていきます。特

に50歳以上になるとゼッケンが目立つようにオレンジ色になり、出場すれば10点満点中9点以上の得点がもらえます。こんな状況ですので、私もついつい「50歳まで頑張ろう」となってしまいます。

③　旧交を深める

社会人大会には京大の体操部のOBチームで出場します。当然住んでいるところはバラバラ、よって練習も各自バラバラです。私は愛知県在住なので、地元の体操クラブで練習させてもらっています。関東の人は関東で、関西の人は関西で、練習場所を確保しながら大会に備えます。よって、年に1度の社会人大会は同窓会となります。1年間の練習の成果を試合で発揮するだけでなく、終わった後の打ち上げは大変盛り上がります。京大のOBだけでなく、大学時代に交流のあった他大学（東大、阪大、神戸大、…）も交えた打ち上げは、楽しみな年中行事となっています。

今年の大会は9月初旬に東京の八王子市で開催されました。写真は試合直後に撮ったものです。左から2番目が筆者です。今年も怪我もなく無事に大会を終えることができました。

「いつまで続けるの?」とよく言われますが、「できる限り、続けたい」と思います。今年の大会には60歳代の方が13人、50歳代の方が24人出場されています。その方々に比べれば、40歳代の私はまだまだひよっこです。社会人大会では、長く出場されている年長者が「功労賞」として表彰される制度があります。今年は50歳代の京大OBが受賞しました。私も今年で卒業以来24回目の出場で、もう少し頑張れば、功労賞も夢ではありません。まずはオレンジゼッケンで得点の底上げをして、その後、功労賞を目指したいと思っています。



＜今年の社会人大会（筆者は左から2番目）＞

毎日忙しくして老化防止

松本　博之
（昭44年卒・中国支部）



私は卒業後中国電力に約32年奉職し、系列会社の中電プラントに5年間勤務した後、故郷の尾道市に帰って、現在、観光ガイドや町内会の世話等で結構毎日忙しく過ごしている。

電力時代は、企画・工務系で系統計画、給電、技術研究所関係の業務に携わらせていただいた。50万ボルト第二ルートの計画に参画したこと、中央給電所長時代、需要急増に対応したこと等が良い思い出となっている。また、海外電力調査会から米国サザン・カリフォルニア・エジソンで研修の機会を得たこと、二度の中央勤務（電事連、中電協）で各電力会社の方々と知己を得たことは、大変、恵まれていたと考えている。

最近、感じていることは、言論の自由・民意の尊重は一般的には良いことであるが、専門家の権威の失墜、衆愚政治（言葉が悪いが）の蔓延である。英国の国民投票によるEUからの離脱は、これまで築いてきた議会制民主主義（選良による多数決原理）を否定するものである。その昔、ギリシャで、陶片追放（陶片に追放する人の名を書く投票）で、僭主になりそうな人を国外追放した。

現在の高度に発展した文明社会では、それぞれの分野の専門家・権威者の意見を尊重すべきで、一時的な感情や民意で中長期的課題を判定することは危ういと考える。

尾道市は、平成27年に「尾道水道が紡ぐ中世からの箱庭的都市」として、日本遺産に認定された。千光寺山から尾道水道を見る景観、古くからの神社・仏閣、志賀直哉・林芙美子の足跡、最近では猫の細道等、見所はたくさんあります。外国の方も沢山いらっしゃいます。今年、村上海賊（因島・能島）も日本遺産に認定された。また、しまなみ街道（尾道～今治）はサイクリストのメッカとして賑わっています。機会がありましたら是非お立ち寄りください。

小惑星探査機「はやぶさ」の功績

大西　隆史
（平7年卒・東京支部）



2010年6月、小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還した。小惑星「イトカワ」で採取した岩石の微粒子を入れた大気圏突入用カプセルを分離し、「はやぶさ」本体は大気圏突入の摩擦熱で燃え尽きながらも、カプセルは大気圏を突破してオーストラリアのウーメラ砂漠へ着地した。眩い光を放ちバラバラに飛散していく「はやぶさ」の印象的な映像は、テレビやインターネット動画で配信され、ご覧になった方も多いことと思う。

私は、「はやぶさ」の軌道決定という業務を、メーカーの立場で担わせていただいた。プロジェクト立ち上げ時の事前検討フェーズから、打ち上げ前のシステム開発、打ち上げ後の運用支援まで、10年以上にわたって

「はやぶさ」プロジェクトのコアメンバーとして従事したことになる。軌道決定というのは、地上局と探査機が電波通信して得られる情報をもとに、探査機が今どこにいるかを正確に把握する作業で、どの探査機でも必要な基盤技術だ。「はやぶさ」は、従来の探査機と異なり、イオンエンジンで常時加速をしていたため、正確な軌道把握に非常に苦労した。私が軌道決定した結果に基づき、「はやぶさ」が当初目指している軌道を維持できるように、軌道計画チームがイオンエンジンの運転計画を調節する。どちらか一方でも間違った答えを出せば、「はやぶさ」が路頭に迷ってしまう、ピッチャーとキャッチャーのような関係だ。

「はやぶさ」は、小惑星への不時着時に受けたダメージを発端として、イオンエンジン以外の化学燃料による推進力を喪失、姿勢制御用ホイールを3台中2台喪失という、まさに満身創痍の状態となった。地球帰還の約半年前には、頼みの綱のイオンエンジンも全て故障し、壊れた2台の生き残った部分をつなぎ合わせて1台分弱の推力を出すというアクロバティックな運用（「ニコイチ運転」と私は呼んでいる）を余儀なくされ、イオンエンジンを停止したら次に再点火できるかどうかも危うい、というような綱渡りだった。大気圏再突入の約2か月前からは、再突入ポイントに軌道を段階的に近づける軌道制御を合計5回行ったが、極めて精密な誘導制御が必要であり、かつ満身創痍の「はやぶさ」が軌道制御できる方向には制約があったため、一度でも制御を失敗すると、その後の運用で取り返すことが出来ない可能性があった。私が軌道決定し、軌道制御計画チームがイオンエンジン運転計画を立案し、それをイオンエンジンチームが実行する。3者間のバトンリレーだったが、そのバトンは、いつ爆発するか分からない爆弾のようなものだった。既に限界を超えた状態の「はやぶさ」は、いつ故障して運用不能となってもおかしくなかったが、バトンがこちらに戻ってくるたびに、自分のターンで自分のせいで運用を終わらせるわけにはいかない、と必死だった。4回目の軌道修正（ＴＣＭ－3）が成功し、「はやぶさ」の再突入ポイントがオーストラリアのウーメラ砂漠領域となったとき、体が本当に浮き上がるかのように軽くなるのを感じて、ああ、これが「肩の荷が下りる」ということか、と得心した。

地球帰還の当日、私は相模原キャンパスの管制室で最後の運用を行っていたが、同キャンパス内では一般見学者へのパブリックビューイングが深夜まで行われ、カプセル再突入の様子がリアルタイムに実況されて、まさにお祭り騒ぎだった。当時、不死鳥のごとき「はやぶさ」の復活劇がインターネット上で盛り上がりを見せており、その影響も大きかっただろう。しかし、この現象は、深夜でも相模原キャンパスへ駆けつけてくださるような「熱心な」ファンの方たちによるものだ。私が、もっと衝撃を受けたのは、その数か月後、相模原キャンパスの向かいの敷地にある相模原市立博物館で開催されていた「はやぶさ」関連の展示とプラネタリウム上映を見に行った時だった。プラネタリウム上映のチケットを券売機で買ったおばあさんが近くの説明員に尋ねかけて「これは、どこで見られますか?」「あー、これは午後の回なので、まだ時間がかかりますよ。午前中の回は既に満席なので…」「あら、そうなの?困ったわねぇ。」その脇では、小惑星「イトカワ」とゴマ粒のように乗っている「はやぶさ」の模型が入ったショーケースに駆け寄る小学生の姉妹が「あー、これ、はやぶさだー!」「はやぶさ、えらいよねー」と楽しそうに会話していた。この光景を見て、ああ、これは本物だ、と思った。これまで、宇宙関係の広報、アウトリーチは色々な方法で試みられてきたが、どうしても受け入れられる範囲が限定的で、認知度を上げることが難しかった。しかし「はやぶさ」は、それを大きく突き抜けることに成功した。それは「はやぶさ」の一種マッチポンプ的なドラマ性による部分もあるかもしれないが、世界で初めて小惑星まで行って帰ってきた、世界初・世界で一番という事実の価値であろう。

「はやぶさ」は、惑星間航行におけるイオンエンジンの長期運転技術や大気圏再突入カプセル技術等の工学的成果、小惑星観測とサンプル採取によるサイエンス的な成果もさることながら、カプセル展示の全国ツアーなど宇宙開発に対する社会の認知度向上に大きく寄与した点が特徴的だ。上野の国立博物館には、「はやぶさ」が持ち帰った「イトカワ」微粒子の一部が寄贈され、常設展示されている。一般の方々が身近に感じられる形で宇宙開発を表現した、実はこれこそが「はやぶさ」が成し遂げた一番大きな功績なのではないか、と私は思うのである。



海外で起業して思うこと
――人と人とのおつきあいの大切さ

川合　一（昭42年卒）



私のようなものに会報への寄稿を依頼してきた無謀な同級生がいます。その彼に、何をお話すればいいのかなと尋ねたところ、「あなたの海外での生活ぶりをありのままに書けばいいのでは」といわれましたので、そんな話を書かせていただこうと思っております。

昭和42年前後の景気といえば、そんなにいいとも思えなかったのですが、私には今で言う就活には無縁でしたので、のんびり学生生活を送っていました。卒業後叔父の経営する40人ほどの中小企業いや零細企業に入ったのですが、出社して周りを見回しても何もない、図面もポンチ絵のようなものがあっただけでした。でも私にはやりがいのある、すべて一から作り出す面白い仕事でした。会社は零細でしたが、しっかり儲けていましたので、新入の若造に、図面整備から生産管理システムなど生産に関することはすべて任せてもらいまして、2年ほどで片付けました。それ以後は、社長の叔父は、ほとんど口を出さず私の提案する計画は任せてもらいました。土地を買収するときには司法書士、特許では弁理士の代わりをし、第2次オイルショックの後には経理も任され会計士、また営業にも出て行きと何でも経験できました。このことが後の海外での起業に大いに役立ちました。会社は、その後順調に事業も拡大し、従業員も200名を超えるようになりました。

ところが1985年のプラザ合意以後の円高ショックの後、海外より安いものがどっと流入してきました。しかしながら安物だったのが幸いして、対応するのに少し時間稼ぎができました。それで私どもも部品を海外から調達しないといけないと、シンガポール、香港、台湾、韓国へ出かけましたが、その当時、私どものお相手をして頂ける各国のメーカさんの製品では、「帯に短し、タスキにも短し」でした。その時、何でも背負いたがる私の悪い癖が出て、「それじゃ自分で作るしかない」と思ってしまったのです。海外へ出るべく調査をしているときに出会ったのが、台湾のある方でしたが、私の眼にはその人はなく、その息子さん達、若い夫婦だったのです。彼らが今の私の台湾でのパートナーです。

そんなことで、1987年に台湾の台南に工場を作りました。会社の設立から工場の建設、人の採用等々何でも自分達でやりました。しかし、ここで若いころの経験が大いに役立ったのですが、それ以上にこのときにお世話になった方々とのおつきあいの中から、気付かされたことがありました。言葉ができなくても、情熱を持ってことにあたり、なにかを実現しようとする心意気は他の人に通じ、何か自分にできることで手助けしてやろうという気持ちにさせるものだということを知らされたのです。「郷に入れば郷に従え」という諺も身にしみて感じましたが、でも私はあることには妥協せず、日本のよき慣習や食文化を守ることも忘れなかったことが良かったとも思っています。現地の方々には、「文化侵略だ」と冗談も言われましたが・・。

しかし、どこの馬の骨かもわからない日本人が一人、現地の方々の協力が得られたのかとよくよく考えてみれば、これは、やはり先人がここ台湾の地で、すばらしい地元への貢献を残してくれていたおかげだと思います。台南の近くに、「烏山頭水庫」というのがあり、このあたり約15万haを大穀倉地帯にしたダムです。これを設計施工したのが石川県出身の八田與一（東京帝国大学土木科）さんなのです。完成して86年になりますがいまだにその業績は、現在の台湾の子供たちにも知られている方です。

日本の統治時代には、当然いろいろ悪しきことも多かったに違いありませんが、でもその中にあって、このような善き事も数多くあった事が私のようなものが「同じ日本人」であるというだけで、恩恵を受けられたのだと思うと本当にありがたく感謝の気持ちで一杯です。私も先人の成果を穢さないように頑張らねばと思っています。

よく私はパスポートを更新するたびに、言われたことは、海外に長期滞在される折には、「必ず在外公館に連絡して下さい」ということでした。しかし今日まで、一度も連絡したことがありません。もちろん会社設立時に台湾の経済部には登録していますので、その関係で必ず日本人会へのお誘いがありました。でも参加する気もありませんでした。理由は、俗に言われる日本人村は私の性に合わないし、せっかく海外にいるのに現地の人と交流しないで、日本人同士が、会社や上司の・・を酒の肴に呑み喰いし、ゴルフをするのか疑問に思っていたからです。身の安全のためだということもよく理解はしていますが、やはり私に必要なのは現地の人たちと交流し、相互理解を深めることがわが身の安全により寄与していると考えていました。

1998年に、私は叔父の会社を辞することにしました。その折台湾進出当初よりの友人に、やっとゴルフも気楽にできるようになったねとあるゴルフ仲間達を紹介され、彼らたちと毎週土曜日にゴルフをして、その晩食事をするという会に入れてもらったのです。それが今はより盛大になって会員12人限定の周六会であります（土曜日会と同じ意味です）。商売とは無縁の12名で、日本人は私一人ですが、毎週楽しく過ごさせていただいて、16年になります。これが今でも台湾に居続けていたい

という原動力かもしれません。

2000年に、1987年に知り合ったご夫婦と、ともに苦労してきた従業員3人と一緒に私は台湾の台南で独立しました。2000年といえば、「日本の失われた20年」といわれた景気後退期のど真ん中でして、友人には「良くこんなときに独立したものだなあ」と心配されましたが、このときも人と人とのご縁に恵まれ、1987年当初に知り合った台湾のあるメーカの社長に、生産ラインの合理化のコンサルタントの仕事をいただいたり、日本の友人に、自分のところの部品の海外調達を依頼されたりで、今の安定経営の礎になりました。口コミのおかげで次々と仕事が舞い込み、途中2008年のリーマンショックなどもありましたが、ほぼ順調に今日まで来られました。これひとえに、人と人との繋がりの賜物だと感謝しております。

勿論、台湾生活30年の間には悲しい事や残念な思い出もあります。信頼していた人に裏切られて大金をなくした事や、親友を3人も癌で亡くした事などもありました。

これから、海外で活躍されるであろう若い方々に申し上げたいのは、折角の海外です、できるだけ現地の方々とのおつきあいを通じて、相互理解と信頼を得て、人生の糧として頂ければいいなあと思います。

最後に、人と人との繋がりということで、報告したい事があります。十数年前の同窓会「42洛友会」に出席したときに、各人近況報告をする機会があり、私は台湾での体験を報告して、ぜひ台湾に遊びにおいで下さいとお誘いをしたのです。そうしたところ、2007年に3名の同級生が台湾旅行に来てくれたのです。「台湾で苦労している川合を慰問しに行こう」という趣旨だとの事でした。うれしかったですね。別に苦労しているとは思っていなかったのですが、異境の地で大変苦労しているのだろうと思われたのでしょう。それから10年毎年、恒例にして頂いて数名ですがお越し頂いています。最近では、湿度の高い酷暑の夏に、南国の果物マンゴウやライチなどを食べに来て頂いております。毎回、日本の先人の苦労の跡を訪ね、お酒を酌み交わしながら、何気ない日常のお話をするだけなのですが、本当に楽しい至福のひと時です。

こんな機会がないと、普段は感謝の言葉など言ったことのない昭和の男の見栄っ張りだと笑われそうですが、こんなことができたのは家族、特に家内の協力があってのことと感謝しております。



同窓会だより

昭和34年卒 電気・電子傘寿記念同窓会

今年の洛友34会同窓会は傘寿記念の同窓会として、観光シーズンには混雑を極める京都を避け、「琵琶湖周航の歌」の舞台であるびわ湖湖畔で5月25日（懇親会）26日（ゴルフ、観光）の両日開催された。



懇親会は湖岸にそそり立つ38階建ての「びわ湖大津プリンスホテル」で開催され36名（名簿在籍者の約6割）が出席した。受付に現れた青木君から、京都からホテルまで歩いて来たと聞き、この歳で！とその健脚ぶりに驚く。全員揃ったところで写真室に行き記念写真を撮った。写真を見る限り、傘寿とは言えまだまだ元気だ。

この後、懇親会場に入り河崎幹事の司会で開会となった。先ずは故人となった5人の友に黙祷。上田代表幹事の挨拶、乾杯の後、同期生でもある長尾洛友会会長から挨拶をいただいた。近年の目覚ましい医学の発展で末期癌さえも直せる所まで来ているとのこと。だが治療費は数千万円もかかるそうで、この低減が問題。それが実現すると益々高齢化が進む。未来は難しい問題が山積しているようだ。

宴会に入る前に、磯田君のフルート演奏があった。地域の吹奏楽団の演奏会で吹いているとのことで、「アルルの女」、「荒城の月」の2曲を独奏で披露。年季の入った妙なる調べに暫し耳を傾けてから食事・歓談となった。

その中程で、河崎幹事から電気系教室の現況紹介があった。

4月始めに引原教授（27年度電気系学科長）に上田、西尾、河﨑幹事が会い教室の現況を伺った。工学部は6学科からなり、電気電子工学科は定員130名、この90％以上が修士課程に進学、博士課程は定員20に対し10名程とのこと。1～3回生の学部教育は基礎（数学、物理、電磁気等）に重点を置き、4回生、修士課程で専門教育がなされる。研究室配属は4回生から。我々全員が行った学外実習は、今は希望者だけとのこと。入学募集は工学部全体で行い、学科は第2志望まで可、入試成績と志望順位で合格者を決める。

入手した教育体系を示す科目系統樹、大学全体の学域と教員構成図は同窓会出席者に配布された。

その後、テーブルスピーチとなり、近況から思い出話まで思い思いに傘寿の節目を飾る話が相次いだ。続いて余興に移り宇田君による日本の伝統芸・南京玉すだれの演技が披露され、伸びたり縮んだりする玉すだれで色んな形を瞬時に作る珍しい芸を大いに楽しんだ。

終わりに近づき今後の洛友34会同窓会のあり方について上田代表幹事から提案があり、以下の事が合意された。『①全国大の大規模同窓会は今回の傘寿同窓会をもって終了とする。②同窓会の開催は関東、関西のグループで個別に行うが、相互の交流出席は歓迎する。③関東は新年会として毎年1月の第3水曜日、関西は来年は5月の第4水曜日に開催。④グループ分けは箱根を境とする。⑤両グループは連絡担当幹事を定め、次の同窓会の内容を互いに知らせる。その情報は自グループのメンバーに知らせ相互交流に資する。』この合意により、幹事の負担が軽くなり今後は開催しやすくなると思う。

最後は、磯田君の指揮で、「琵琶湖周航の歌」、「逍遙の歌」を全員で大合唱し散会となった。懇親会場出口では出来たばかりの記念写真が手渡され、帰途につく人、宿泊の人と別れを惜しんだ。

宿泊組は懇親会の余韻覚めやらず、38階のスカイラウンジに凡そ20人位が集まり、ワイワイ、ガヤガヤ、懇親会で言い足りなかったことが二次会で噴出した感じで、それこそ学生時代に戻ったような雰囲気だった。暫く会わなくても会えば直ぐうちとけられる、これが同窓の友の良さだろうか。

懇親会翌日の行事には、ゴルフ6名、乗船コース9名、散策コース8名が参加しそれぞれ楽しんだ。雨マークも出ていた天気予報が見事に外れ、薄曇りから次第に青空も覗くようになり、天も我々の傘寿を祝ってくれるかのようだった。

ゴルフ組は井上幹事の手配で名門・瀬田ゴルフコースを使用、ダブルペリアで腕を競った。結果は優勝森田君、2位伊藤（俊）君、3位は川本君だった。ベストグロスは伊藤君の86だった。このコースでは、ゴールドティがなく、シニアはレッドティを使用した。

乗船組は、後輪を回転させ水をかいてゆっくり推進するミシガン船に乗ってびわ湖南端部を遊覧。

びわ湖をわたる心地よい風に吹かれながら、周囲の山々や遠くにびわ湖大橋を望見することが出来た。途中、西尾幹事から京大ボート部の艇庫（ボート収納建物。入口の上に三高時代の徽章が残してある。）、びわ湖疎水の取水口の場所を教えて貰った。80分ほどの船旅は年配者には程良いひと時だった。

散策組は、中野幹事の先導で、今津から船に乗り竹生島に上陸、島を巡る石段道を一巡。こは健脚の人も流石に草臥れたようだ。しかし踏破すれば中々爽快で良い散策コースだとの感想もあった。再び船に乗り長浜に渡り、長浜市内の名所を幾つか廻ってから米原に出て新幹線他でそれぞれ帰途に着いた。磯田君の歩数計では約2万歩。距離に換算すると14kmほどとか。傘寿にはハードな行程のようだったが、全員何事もなく健康優良爺ぶりだった。春野君に到っては、長浜でレンタサイクルを借りて名所・旧跡を廻ったそうで、その気の若さに脱帽！

かくして傘寿同窓会は無事終了。人生の夕焼け時にさしかかってきたが同窓の友に会えば不思議と「生」への刺激を受ける事を感じた同窓会でした。

（宇田裕重まとめ）

昭和38年卒業生同窓会

2016年5月20日（金）、五月晴れに恵まれて、奈良市の料亭「菊水楼」において、昭和38年電気・電子卒業生同窓会を開催し、27名が参加しました。15年ぐらい前まで3年に1度のペースで開催しておりましたが、最近では2年乃至1年半に1回のペースで、関西地域と関東地域で交互に開催しております。今回は関西地域の担当で、奈良での開催は初めてでした。従来夜の会合であったものを、今回は初めて昼の会合としました。これは参加者の負担が軽くなり好評でした。また、幹事の負担を軽減するため、Eメイルで連絡することを原則とし、郵便による連絡は最小限に留めました。


昭和38年京大電気電子卒業生同窓会 2016/05/20(金) 於奈良市菊水楼

当日は定刻前に全員集合し、集合写真を撮った後、食事会を楽しみました。乾杯の後、和気合い合いとした談笑の中で会食を始め、会食の途中から全員の2分間スピーチにより、交流を深めました。その中で、中田良

知君から肩の凝らないクイズを加えた「囲碁の話」があり、井山名人・本因坊の7冠達成や「アルファ碁」の解説がありました。次回は関東で開催し、山澤穣氏が主任幹事を引き受けて下さいました。最後は、村井真一君の指揮により、「逍遥の歌」と「琵琶湖周航」の歌を斉唱して終了しました。

終了後は自由行動でしたが、奈良国立博物館の特別展「信貴山縁起絵巻」を訪れた組、新薬師寺まで足を延ばした組、喫茶店で談笑の続きを行った組もありました。

（幹事）大引得弘、田畑孝一、中村韶、古濱洋治、（古濱　記）

支部だより

中国支部総会報告

平成28年5月27日（金）ANAクラウンプラザホテル広島において第63回となる平成28年度洛友会中国支部総会を開催しました。

総会には教室から竹内繁樹先生をお迎えし、中国地方各地から20名の会員のご参加をいただきました。当日は、米国のオバマ大統領の広島訪問と重なりましたが、会員のご協力を得て予定通り開催することができました。



総会は、開会にあたり松井支部長からご挨拶をいただき、続いて支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予算案、支部役員の改選案について説明・提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。続いて竹内先生から洛友会本部の近況および大学の近況についてお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

総会終了後、記念撮影を行い、昭和28年卒業の池内先輩のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、昭和36年卒業の井上先輩のご発声で支部懇親会をおひらきとしました。

平岡 正憲（平10年卒）記

北海道支部総会報告

去る5月28日（土）18時より札幌市内のホテルポールスター札幌にて平成28年度北海道支部総会を開催しました。

今回は本部よりお越しいただいた石井先生を含めて11名での開催となりました。

最初に、澤井支部長より、年1回の支部総会がメンバーと会える貴重な機会となっており楽しみにしていること、また、本部の近況などをご紹介いただくために石井先生に遠路お越しいただいたことへの御礼、今後も支部総会に多数のご出席をいただき継続していきたいことについてご挨拶をいただきました。

続いて、幹事より前年度会計報告、今年度予算案、幹事交代（木元幹事の退任、佐野会計幹事が幹事新任）についてご説明し、承認いただきました。さらに支部長より本部総会の状況についてご紹介いただきました。

さらに、石井先生より本部の近況紹介として、学生と先輩との交流会やエレクトロニクスサマーキャンプ、企業交流会、懇話会、茶話会、送別会、入学式後の歓迎会の状況、洛友会ホームページがリニューアルしオンラインで会費納入が可能となっていること、吉田キャンパスの耐震工事完了および桂キャンパスに物理工学科が移転完了し全容が整ったことなどについて、パワーポイントを中心に出席者からの質問にもお答えいただきながらご説明いただきました。

この後、澤井支部長のご発声により、懇親会に移り恒例に従い会員の近況報告等を中心に話題を進めました。

この中では、現在のお仕事に関する話題や趣味、学生時代の思い出や卒業後に京都を訪れた際のトピックスなどについて歓談し、懇親を深めました。

いつものことではありますが、予定していた時間はすぐに経過し、次回の再会を願いながら、お開きとなりました。

北海道支部の支部総会は徐々に出席人数が増えておりまして、今後もこれまで参加されていない方のご出席をお待ちしています。

また、石井先生に本部の近況についてご紹介いただいたことが出席者にとって非常に有意義だったとの感想をいただきましたので、今後も継続的に本部より支部総会にご出席いただけるよう、本部と連携していきたいと考えております。

最後に、今回記念撮影を失念してしまい、文章のみのご報告となりますこと、深くお詫び申し上げます。

佐野 大輝（平16年卒）記

東京支部総会報告

平成28年6月26日（日）、学士会館にて、東京支部総会、講演会及び懇親会を開催しました。本部より長尾会長、荒木幹事長、佐藤事務局長を初め多数の来賓をお招きし、60名の参加をいただき、例年どおりの盛会となりました。

【支部総会】

支部総会は田邉総務幹事の司会により、午後3時に成宮支部長による挨拶で始まりました。

田邉総務幹事より平成27年度行事・活動報告［第一号議案］があり、支部総会の講演会では、京都大学・宇宙総合学研究ユニット特任教授の中野不二男先生を

講師にお招きし、大変興味深いご講演を頂けたこと、その後の懇親会も長尾会長のご挨拶を初めとして、米寿、喜寿を迎えられた方の一言や、「琵琶湖周航の歌」合唱で大盛況であったこと、秋の講演会では京都大学生命科学研究科高次元遺伝情報学分野教授の米原伸先生より、「細胞の死が支える生体の生と機能～自爆するための細胞表層レセプターの発見から多様なプログラム～」と題して講演を戴き、細胞の死が生体の維持にどれだけ大切かを改めて感じさせられたこと、春の見学会は情報通信研究機構を訪問し、サイバー攻撃を検出するシステムnicter、フェーズドアレイ気象レーダ、光通信基盤技術、日本標準時の技術の見学など充実した内容であったこと、2月の若手交流会は明治大学国際総合研究所フェロー・元NTTデータ代表取締役社長の浜口雄一様をお招きして「企業変革のリーダーシップと社員力」と題して、ご講演いただくことで例年にも増して若手会員の参加者が多かった、などの紹介がありました。また、5つの趣味の会、5つの拡大クラス会の状況について報告があり、拍手をもって承認されました。

続けて、平成27年度決算報告および監査報告［第二号議案］があり、ほぼ予算計画通りの決算となったことが福原会計幹事より説明されました。この決算内容に対し、真崎監事から適正に会計処理され決算報告に記載されているとの監査報告が行われ、決算報告および監査報告は拍手をもって承認されました。

次に、平成28年度の役員／幹事［第三号議案］の提案が行われました。平成28年度の新役員／新幹事は、支部長　小森光修（S50年卒）、副支部長　下村寛士（S51年卒）、監事　得井慶昌（S52年卒）、総務幹事　福原忠行（H9年卒）、会計幹事　山本輝哉（H10年卒）、庶務幹事　工藤伊知郎（H10年卒）、若手勉強会幹事　田邉義孝（H8年卒）の7名となりました。また、拡大クラス会ではおぼろ会は活動終了になったことと新規クラス会（S55～S59年卒）を新設予定であることをご報告しました。質疑応答にて指摘のあった拡大クラス会の幹事及び学年幹事は再確認することを条件とし、拍手をもって承認されました。

成宮支部長から退任の挨拶がありました。「支部長として1年、役員としては3年間、皆様のご協力も得ながら会員の皆様が少しでも多く参加できることを目的として企画に取り組んできました。特に若手交流会については開催曜日の変更など取り組んできた結果、少しずつ多くの若手に参加をしてもらえるようになってきました。東京支部の会員数が少しずつ減ってきているのは憂慮するべきことであり、是非皆様のご協力をもとに身近な方・職場関係などお声をかけていただき、是非多くの方に洛友会に参加していただきたい。」との話がありました。

引き続き、小森新支部長から就任の挨拶がありました。「役員としては2年実施してきました。会員数、若手参加の課題はありますが、新体制として支部長、副支部長、監事、若手幹事4名の計7名で今年度進めていきます。」との話がありました。

次に、福原新総務幹事から、平成28年度行事・活動計画［第四号議案］について説明を行いました。例年通り、秋の講演会、若手交流会、春の見学会などの行事、拡大クラス会（昨年同様の開催を予定、S55～S59年卒の拡大クラス会の設立を目指す）・趣味の会を実施すると共に、登録会員数向上、若手活性化施策、全学同窓会活動との連携を検討していくこと、などが説明されました。質疑応答にあがった2件（趣味の会は若手が参加できるような新規追加検討、会費納入率の向上）は今後検討していくこととし、拍手をもって承認されました。更に、平成28年度予算計画［第五号議案］が説明され、拍手をもって承認されました。



小森新支部長



成宮支部長

続いて、福原新総務幹事から洛友会東京支部会則の改正［第六号議案］について、若手勉強会の名称を若手交流会に変更する提案と拡大クラス会の統合を可能にする提案を行い、拍手をもって承認されました。

その後、平成28年度に米寿・喜寿を迎えられた方々（米寿2名）に対し、大きな拍手と共に会場より祝意が表されました。

次に、洛友会本部の荒木幹事長より平成28年度の事業計画についてご説明いただきました。会員数・会費納入状況の説明、会員専用WEBサービスなどについて紹介されました。また、佐藤事務局長から教室の近況として、吉田キャンパス及び桂キャンパスの状況、大学・電気電子系組織の紹介、学生の就職状況の説明がありました。

以上をもって、平成28年度洛友会東京支部総会は閉会となりました。

【講演会】

「高齢化社会で健康に生きる」と題して、聖路加国際病院　福井次矢院長様からご講演いただきました。

ご講演内容

日本人の主な死因に老衰が5位に入ったことからはじまり、最近社会でも取り上げられるようになった「健康寿命」の重要性について紹介していただきました。健康寿命とは「普通に生活できる期間」であり、平均寿命と健康寿命の差は男性で約9

年、女性で約12年となっており、健康寿命の延長が国家的な目標となってきた。非健康寿命の主な原因として脳卒中・心不全、認知症、骨折、慢性閉塞性肺疾患（ＣＯＰＤ）を挙げられ、ＣＯＰＤは煙草を吸う方のみなるため、喫煙者は本日からでも是非やめることを推奨されました。

健康的な加齢とは「身体に障害がない」、「生活に満足し、楽しむことができる」、「制限がなく、身体的・精神的・社会的に思い通りに活動できる」ことであり、そうするためには病気にならない（一次予防）、早く病気を発見し対処する（二次予防）が重要とし、余命を短縮するのは「沈黙（症状に乏しい）の病気（糖尿、高血圧、肥満など）」によって引き起こされ、それは誤った生活習慣、遺伝要因、環境要因からなると説明していただきました。各習慣（禁煙、食事、過剰な脂肪摂取、運動）の影響を説明していただく中で睡眠時間は長くても・短くても駄目であり、適切な時間（７－８時間）が最もよいという点は大変興味深かった点です。それ以外に、がんを防ぐための12か条を紹介、地域の医療施設についての正しい情報を入手、医療制度についての正しい情報の入手・理解、適切な医療施設にいく重要性、更にはこれらの正しい行動をするためには、自分から命について常に学ぶ姿勢が重要であることを説いていただきました。

次に、日野原重明先生の健康データを一般の同年代のデータと比較して、脳の状態・心臓の冠状動脈の状態が驚くほどきれいであり、日野原先生の「10の生活習慣」及び「１００歳になるための１００の方法」を紹介していただきました。

医療の現状と展望として、健康寿命としてみると日本は一番であるが、医療制度全体の世界ランキングはフランスがトップで日本は10番である。高齢化社会になる速さは類をみないため（フランスは１１０年かかったが日本は24年でなっている）、アジアの国々も日本の今後に注目している。直面する課題・方向については、量的（寿命）についてはトップを達成したが、質的（ＱＯＬ、健康寿命）側面の改善の余地がある点、医療費の高騰や保障制度の問題、死の受容様式と文化の対応、医学研究や先進医療の推進の必要性、医療の国際展開を論じられました。最後に、「寄付をすると血圧が下がる」ということをメカニズム含めて興味深く紹介していただき講演を締めくくられました。

福井次矢院長様の１時間半の講演を通して、高齢者になっても健康に生きるためには常に自ら情報を収集し学んでいく姿勢が重要性であることを認識させていただけるもので、大変興味深いご講演でした。


福井　次矢　様


講演の様子

【懇親会】

午後５時より、恒例の懇親会に移りました。懇親会は、小森新支部長の開会のご挨拶のあと、長尾会長のご挨拶と乾杯のご発声で始まり、例年通りの幅広い年齢層にわたる多彩な参加者の交流の場となりました。会員の方々の活発な意見交換が行われました。趣味の会幹事の方から各会のご紹介、米寿・喜寿を迎えられた方から一言を頂いた後、山本新会計幹事の音頭により、恒例の「洛友会の歌」及び「琵琶湖周航の歌」を合唱しました。最後に、下村新副支部長の中締めにより、午後18時30分に散会となりました。


琵琶湖周航の歌斉唱

会計幹事　山本輝哉（Ｈ10年卒）記

洛友会東北支部総会報告

平成28年7月2日（土）、仙台市内の「みわ亭」で平成28年度東北支部総会が開催されました。本部より藤田静雄教授・洛友会幹事の御出席をいただき、東北支部からは5名が出席しました。

総会は井上支部長のご挨拶で始まり、議事では27年度決算報告、28年度予算案、28年度東北支部役員案について幹事より説明があり、参加者全員の一致で承認されました。続いて藤田先生より京大電気系教室の近況などについてお話しいただきました。

総会後には懇親会を行いました。東北支部の活動は年1回の



総会のみですが、今回初参加の2名を加えて各自の近況について、学生時代の研究活動と最新の技術動向やお世話になった先生の思い出の話、東日本大震災発生直後の被災の様子と復旧状況、再生可能エネルギー拡大や原子力再稼働の課題など広く自由な雰囲気で議論に花が咲き、あっという間に予定の時間となりました。来年の総会での再会を約して散会となりました。

秋山康人（昭57年卒）記

中国支部　企業見学会の開催について

平成28年1月16日（土）に17名の支部会員に参加していただき、広島県の大崎上島にある大崎クールジェン株式会社様を訪問しました。

大崎クールジェン株式会社様は、「石炭ガス化燃料電池複合発電（IGFC: Integrated Coal Gasification Fuel Cell Combined Cycle）の基盤技術である酸素吹石炭ガス化複合発電（酸素吹IGCC:Integrated Coal Combined Cycle）および二酸化炭素分離回収技術に関する大型実証設備の建設および試験の実施」を事業内容として、平成21年7月に設立されました。

当日は、我が国のエネルギー情勢を踏まえて、高効率石炭火力の実現に向けたIGFCならびにIGCC技術開発の意義を始め、プロジェクトの概要、実証試験プラントの設備構成等をご説明いただいた後、現地にて建設状況をご紹介頂きました。

現地では、主要な機器据付は完了しており、保温材設置、機器単体試運転等を進めておられ、平成28年6月頃から総合試運転を開始する予定とのことでした。



また、空気分離設備、ガス化炉、ガス精製設備等、通常の火力プラントにはあまり見られない設備もある中、社員の皆様は、様々な協力会社の方々と一丸となって革新的技術の開発に取り組まれている姿が印象的でした。

大崎クールジェン株式会社の皆様には、休日での見学対応にも関わらず、ご丁寧に説明頂き、会員一同、プロジェクトに関する知識を深めるとともに、大変感銘を受けました。

見学会後は、きのえ温泉ホテル清風館での瀬戸内の幸を堪能した懇親会ならびに美しい島々を眺めながらの温泉入浴、帰路で立ち寄った小京都・竹原での散策を通じて、会員間の親睦を深めることができました。

今後ともより多くの会員の皆さまに参加していただける企画を実行し、洛友会中国支部の活動を盛り上げていきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

望月　和之（平14年卒）記

関西支部　平成28年度異業種交流会報告

洛友会関西支部では、平成22年度から若手を中心に相互交流と自己研鑽を目的に「異業種交流会」を行っており、本年は平成28年9月23日（金）に関電会館エルガーデンにおいて7回目となる会合を開催いたしました。



交流会では、株式会社ケイ・オプティコム　代表取締役副社長の山崎幸郎（ヤマサキユキオ）様より、「関西電力グループにおける通信事業の歩み」と題してご講演をいただきました。関西地区の固定通信サービスおよび移動体通信サービスが発展してきた経緯と今後の展望について、TVコマーシャル映像も交えながら丁寧にご説明をいただき、32名の参加者は熱心に聞き入っていました。

懇親会では、近況を報告し合うなど、業種や世代の垣根を越えた会員相互間の交流も深まり、大変意義深い会となりました。

沖 雅雄（昭63年卒）記

訃報

昭33　廣　豊　28・7・20

以上の方がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

事務局だより

サーバーの不調により長らくご迷惑をおかけしておりました、過去の洛友会会報第1号からのバックナンバーPDF版のページですが、新しく電気電子工学科のホームページ内に作成しなおしました。

洛友会ホームページの「資料庫」にリンクがありますので、そちらよりご覧ください。

洛友会ホームページ：
http://www.rakuyukai.org/